

「セキユリティ」ということばは、ふつう安全保障、防護措置や保安措置といった堅い意味あいをもつ概念である。個人や国家のレベルで、安全を脅かす脅威を除去したり予防したりすることを意味する。日本語の「安保」は、特に国家のレベルでの、防衛的な軍事的の整備や、友好国との軍事同盟のことを指す。しかしこの語は、もともと一般的に安心や安全を意味している。一九九〇年代前半から国連を中心に使われはじめ、現在は日本政府も開発途上国に対する援助政策の柱として「ヒューマン・セキユリティ」（人間の安全保障）のセキユリティはこの広い意味である。具体的には、「欠乏からの自由」と「恐怖からの自由」を実現することで、全人類の一人ひとりの人間が、安全に安心して暮らすことができるような世界を創ることを目指している。

フード・セキユリティは、ヒューマン・セキユリティより遅れて、二一世紀になってから国連機関、国際NGOや各国政府によって使われだした概念である。セキユリティは安全保障と訳すしかないで、食料（糧）安全保障と訳されることが多い。個人や世帯、あるいは国家のレベルで、安全で十分な食料をいかに確保するのかを考えるための概念だ。国家のレベルで用いられると、旧来の安全保障の概念に近くなる。たとえば食料自給率が低下し続ける日本において、世界的な人口増加と気候変動および環境の悪化のもとで、近い将来の食料不足が予測されるなか、また輸入のさらなる自由化によって自国の

食卓から  
世界を見る

## 人間学の キーワード

# フード・セキユリティ

## Food Security

くりもと えいせい 栗本 英世 大阪大学大学院教授

農業の衰退が目前に迫っているなかで、フード・セキユリティをどう確保すべきかという課題は、国家の安全保障の重要な一部である。

他方で、フード・セキユリティはヒューマン・セキユリティの一部でもある。食べることは、人間の生存にとってもっとも基本的な行為である。よほどの貧困や飢餓状態にない限り、あらゆる人間は毎日なにかを食べている。人間一人ひとりが、安全で十分な食料をどうすれば確保できるのかという問題は、欠乏と恐怖からの自由を考えるうえで、まさに不可欠の要因である。人類学や民族学におけるフード・セキユリティの研究は、このヒューマン・セキユリティの問題と深くかかわっている。これは古くて新しいテーマである。人類学は、世界各地のさまざまな民族の人たちが、世帯レベルで毎日の食料をいかに獲得し、料理し、食べているのかに注目してデータを収集してきた。今日の世界では、こうした日常生活の実践の細部に注目するデータは、ただちにナショナル、そしてグローバルな次元の問題と結びつく。現在の日本で、わたしたちが、毎日なにを、誰と、どうやって食べているのか想像してみよう。そこには食生活の変化だけでなく、家族の変容やグローバルな食料の生産と流通、消費の動態が集約されてあらわれているはずである。細部に注目することで世界が見えてくる。人類学的なフード・セキユリティの研究の面白さはそこにあるといえる。